

「自律的な学習者」を育む指導に向けて

最後に、東京大大学院・植阪友理助教と岡山市立野谷小学校・床勝信教頭の対談、床先生の実践、および2校の実践事例を通じた編集部からの提案と、「自律的な学習者」を育てていくための学び方指導のポイントをまとめた。

今回の特集を通して編集部が伝えたいこと

学び方指導で学習観を変え 学力向上につなげる

本特集の企画を立てる過程で多くの先生に意見をうかがった。そこで見えてきたのは、「一生懸命に課題に取り組むが、与えられた問題をこなすことしか考えていない」「家庭学習の重要性を伝えても、何をどのように勉強したら良いか分かっていない」「学び方以前に学習意欲がない」といった生徒の姿だった。学習意欲が低い生徒だけでなく、頑張っ

て学習しているのに学力が上がらないといった悩みを抱える生徒に対して、今回は生徒の「学び方」に着目し、その解決の方向性を考える特集を組んだ。

学び方を変えるために、生徒の理解の自身を問うと共に、授業のデザインを変え、評価の方法を変える重要性が指摘された。教師に限らず、生徒や保護者を取り巻く教育関係者が生徒の学力向上を図る際、学習時間や教材の質に頼った課題解決を図る傾向にあるが、まず生徒の「学び方」を変えることによって、学習に対する考え方（学習観）を変え、学力向上につなげるという指導は、非常に示唆的であった。

つの間違いから学び取る力を高めていく指導が、より一層重要になるのではないかと。もちろん、生徒の学び方を変え、更に学習観をも変えることは容易ではなく、すぐに成果が得られるものでもない。しかし、今の中学生が抱える学習課題の本質を捉え、認知心理学の知見を生かし、粘り強く指導改善に取り組んでいる植阪助教と床教頭の実践は素晴らしい、その蓄積から我々が学べることは多いのではないかと。

同様に、岐阜市立東長良中学校や安曇野市立穂高東中学校の指導にも、生徒の「学び方」を変えていく上で重要な指導の工夫が見られた。東長良中学校では、単に学習シラバスを配布するだけでなく、学習シラバスを活用させながら、多様な学び方を相対化し、自分や自分たちの学級に合った学び方を学び合う場を用意する大切さが示された。学び方を変える第一歩として、自分自身を見つめ直す、自分の間違いや失敗に目を向けることが不可欠

経済的に明るい兆しが見えにくい社会情勢の中で、短時間かつ少ないコストと負荷で、いかに多くの知識やスキルを獲得できるかという効率性が、ますます重視されるようになっていく。そのような「効率性」を求める時代だからこそ、生徒が何をどのように理解したのかを丁寧に見取り、その学習プロセスや1

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

であるが、それは安心して学び合えるという集団があつて初めて成立する。その意味で、教師主導ではなく、生徒が主体的に学年を超えて「学び方」を学び合う「学習活動創造会」は、生徒の自治性を育むという側面でも興味深い取り組みである。

また、穂高東中学校の松島千尋先生の実践では、生徒が主体的に学習するために、生徒個々の「必要感」を課題に盛り込み、生徒が能動的に動けるクラスづくりを行う重要性が指摘された。生徒が「書きたい」「話したい」

とこだわられる課題を取り入れることで、学習意欲だけでなく、その学び方（粘り強く最後まで英文を修正する）までもが変わるといった生徒の変容が、何よりもその成果を示すものだろう。

生徒は何かを学ぶ時に、同時にその学び方も学んでいる。生徒がどのような考え方を持って学習に取り組んでいるのか。学びに向かう意欲を支える「学習に対する考え方」にも注意を払いながら「学び方」を指導することが求められているのではないだろうか。

対談・2校の取り組みから学ぶ 学び方指導のポイント

「学び方」を変えるために
指導だけでなく評価も変える

東京大大学院の植阪友理助教と岡山市立野谷小学校の床勝信教頭との対談（P.6）では、生徒が「公式を覚えるだけでなく、なぜ公式が成立するのか」までを理解するために、授業だけでなく、補足のプリント教材や定期考査まで変える重要性が語られた。

しかし、従来の指導スタイルを大きく変えることについて、不安を覚える先生も多いのではない。床先生は結果的に演習問題を減らすという指導変革を行ったが、演習問題を

解かせる指導に否定的なわけではない。あくまで目の前の生徒の「つまずき」を解決するために、どこから指導していくかを重視した結果であり、それが今回は「学び方から変える指導」ということであった。一人ひとりの生徒が抱える課題はさまざまではあるが、生徒の学習課題を解決するために「生徒の理解」にまで踏み込んだ指導は、全国の先生にも参考にしていただけるのではない。

学習シラバスを活用しながら
多様な学び方を学ばせ合う

岐阜市立東長良中学校（P.14）は、学年・

教科ごとに学習シラバスを作成し、学び方や学び合いの進め方を指導していた。学習シラバスの配布だけでは、生徒が自ら学習に向かう態度や学び方を身に付けることは難しいという課題意識から、生徒が他学年・他学級の授業を参観して学び方を学び、自分たちの学級の学び方を改善する活動をしていた。

「学習の手引きを作成したが、あまり生徒に活用されていない」という先生の声を耳にするが、東長良中学校のように、学習シラバスを土台にしつつ、体験を伴った学び方の改善、創造につなげるという活動は、より実践的な学び方指導の一例として参考になるだろう。

生徒個々の必要感を課題に盛り込み
意欲だけでなく学び方も変える

安曇野市立穂高東中学校の松島千尋先生（P.20）が担当する英語の授業では、学習意欲をあまり持てない生徒たちが継続的に学びに向かうための指導の工夫として「生徒個々の必要感」を重視した授業を行っていた。

そして、学びに向かう意欲を高め、学び方まで変える実践のポイントとして、何より生徒が互いの理解を共有し合える場をつくり、安心して学び合える人間関係をつくることの重要性を指摘した。特に、「学び方以前の学習意欲から」という課題を抱えている先生方に共感いただける内容なのではないか。